



TITLE:

大間地域ニホンザル群の遊動生活 (Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

足沢, 貞成

CITATION:

足沢, 貞成. 大間地域ニホンザル群の遊動生活(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1974, 3: 26-27

ISSUE DATE:

1974-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162528>

RIGHT:

第2表 クズとコムギの混合食の場合の消化率

個体名	クズ摂食 総重量	コムギ摂 食総重量	総糞重量	クズ消化率*	クズの分 の糞重量	コムギの 糞重量	コムギの消 化率 (%)
MY 2	306	605	208	63.8	110	97	83.9
T 18	179	607	167	53.9	82	84	86.1
T 20	132	512	98	65.7	45	52	89.7
T 161	190	572	157	50.1	95	62	89.1
MK29	218	615	158	66.3	73	84	86.2
平均	205.0	582.2	157.6	59.9	81.0	75.8	87.0

* 第1表よりの値

るが、最近、(Herbivorous, Frugivorous)→Omnivorous といった図式の中に、種子食 (Grainivorous) を導入する必要があることを、Jolly, 伊谷, 鈴木, 河合らが指摘している。この問題について、禾本科(ここではコムギ)の種子消化率と栄養価が、葉のそれよりずっと高いことは、一つの示唆を与えるものと思われる。

野猿公園では、ボビュレーションが増加の一途をたどり、直線的に増える傾向をもっているが、自然群ではこのような傾向がみられず、ボビュレーション増加について何らかの強い抑制因子が働いていると考えられる。野猿公園では、現在年間通じてコムギや大豆を与えている所が非常に多い。この問題は、一つは食物の面から解析する必要があると考えられるが、自然食と投与食との間に、栄養的にみて大きな差があることがわかったわけで、ボビュレーション動態の解析に、食物の面からのアプローチについて一つの基礎を得たと思う。

大間地域ニホンザル群の遊動生活

足 沢 貞 成

下北半島北西部大間地域には、およそ 65 km² の地域に 3 群、125 頭前後の野生ニホンザルの生息が知られている (1973年1月現在)。この地域は、大規模な人工造林化は近年になるまで進められなかったので、この生息域の広がりとし生息密度の低さは、ほぼこの地域のニホンザルの自然状態を表わしているものと考えられる。

とすると、周年にわたる遊動生活と、各群のサイズと構成の年次変動を明らかにしてゆくことによって、寒冷地・積雪地の中でも最北限に生息するニホンザルの生息条件の大要が明らかにされるものと考えられる。

近年になって、積雪期 (主に12月と3月) の生活に関するいくつかの知見が得られ、3群の構成もほぼおさえられたが、非積雪期に関しては、断片的な情報しかない。

そこで筆者は、非積雪期の調査の第一歩として、1972年5月に22日間、10月に15日間、主として易国間川流域に調査に入り、8月・9月の2カ月間、脇の沢村の依頼による畑荒しの防御の傍ら、この季節における九艘泊りの群れの食物の調査を行なった。なお、10月の際には真野哲三氏の協力を得た。

1) 易国間 (I群) の群れに関しては、9月中旬以降の聞き込み情報及び視察例はあるが、中旬以前の非積雪期の情報は全くない。5月の調査でも、易国間川の大石沢より上流域及び大畑川の下近藤沢、弥一郎沢流域を歩き廻って、善兵衛沢右岸の保帯林とその上部の後線上で各1個のフンを見つけたにとどまった。群れのものは判らない。従ってこの季節の遊動の有様は全くつかめなかった。

2) 10月の調査では、滝の沢流域数カ所でフンを見つけ、倉の沢との出会いで一度直接観察を行なった。この場合は我々が20mとない距離にまで接近して、初めて暗いヒバの中から発せられた低くて小さい警戒音で気付いたもので、そのメスが最後まで残った。このI群はその後の調査結果から云っても、メスがリーダーである可能性が高い。

3) 5月、10月とも、ごくわずかな知見しか得られなかった。この地域の非積雪期の調査は、生息域の広さ、山容、ヒバの密度の高い林相からいって、かなり困難を感じさせる。又、サル道らしいものほとんど発見できない。しかし、準サル道はあるに違いない。九艘泊りの群れの各季節の主食物と対応する食跡調査などを重ねて、徐々にでもサルの発見率を高めて行きたい。

4) 8、9月は年間を通じて、植物の実りの最も豊かな時期で、九艘泊りの群れでは果実類が好んでよく食われている。このうち、カンワ、ホオノキの実は量的に少ないのだが、好みは大きいようであった。しかし、トチノキ、ミズナラの実に関しては、量的には最も多いにも

かかわらず、種皮の部分をわずかに噛みけずるのが散見された程度であった。なお、武士泊りの浜では、ハマナシの実が好んで食われていた。

動物では、クワガタムシ、セミ、ヨコエビ、トビムシが好まれ、アブ（二種）も食われていた。

臥牛山の群れの社会変動の追跡と分裂群

古屋 義男（高知女子大・家政）

臥牛山の群れについては、1971年7月に個体数調査をおこない、その結果は本年報 Vol. 2 (1972) に報告した。本年の調査目的のひとつは、この群れのその後の変動を追跡することであった。

1971年当時、リーダーは第1位 Mon（推定30才以上）、以下 Katame（20～25才）、Gon（19才・一生年が確認されている）、Kobu（16才）の4頭、サブリーダーは Yasu（11～15才）、Kuni（10才）、Ken（8才）の3頭であった。

1. 1971年12月上旬、Mon の順位下降、Kobu の離脱という変動がおこった。“Mon は、第1位から第7位、つまりサブリーダーの Ken の下位にまで順位が下降した。このとき Mon をはげしく追ったのは Gon と Kobu であった。Kobu は、それより約10日後、左足に大怪我をして餌場にあらわれ、それから3日後姿を消した。怪我も他のサルによるものか、野犬によるものかわからない。”（臥牛山自然動物園藤田村治氏による）。

2. Mon は、その後もそのままの地位で群れにとどまったが、1972年9月、群れが約10日間の遊動をして、餌場にもどってきたときに姿を消していた（藤田氏による）。

3. 臥牛山の群れの個体数は、1971年の調査時に155頭と推定した。1972年に25頭出産、1972年中に捕獲されたサルは約20頭と推定される。自然死および群れからの離脱は確認されたものだけで5頭（Mon、Kobu、老令のメス2頭、1972年生まれのアカン坊1頭）である。一方、群れの移動時に個体数をかぞえる方法による1972年10月のこの群れの推定個体数は140～150頭であった。

4. Mon の群れからの離脱は、上記の結果から、メスをつれて10頭程度の分裂群を形成してでていったという可能性を否定することはできない。

5. 1972年10月には、Yasu、Kuni もくわえて4頭のリーダー、Ken のサブリーダーという構成となった。Ken は中心部ではメスに追われる等、Yasu、Kuni とは行動上、明瞭なちがいが認められる。

臥牛山の群れに関してのもうひとつの調査目的は分裂群の動向であった。1955年以後、5回の分裂がおこった

が、これまでに餌場につねに現われる主群の他に1群の存在しか確認されていない。その群れは約50頭とみられていた。

この分裂群のさらに詳しい確実な資料を得るために、本年は調査日数の大半をこれにあてたが、目撃できたのは2回にすぎず、今後課題はもちこされた。数人同時に追跡する方法など、調査方法を改めねばならない。

1. 2回の直接観察と遊動域内の住民よりの情報をあわせてみると、1群しか存在しないこと、その数は50頭よりさらに少なく30頭と推定されること、この群れは餌場へは絶対にあらわれず、遊動域を餌場の反対方向にすこしずつ拡張していること、などは確かである。

2. オスのヒトリザル、あるいは数頭よりなるオスだけのグループが、主群ならびに分裂群の遊動域外の周辺地域に出没することが最近多くなっている。これらのサルは比較的人馴れをしていることから、臥牛山の群れからでていったものと考えられる。

3. 分裂群はオスがメスに比して多い構成をもっているため、分裂後再離脱するオスがでて、分裂群はさらに個体数をへらすことは予想されていたことであった。この点のさらに詳しい調査が今後に残されている。

野生ニホンザルの日周活動リズム¹⁾

四元 伸子（東大・理）

はじめに

筆者は前年度にひき続いて、高岩山自然群（I-b 群）の遊動生活を調査した。現在、資料を整理中であるが、今回は比較的整理の終った1972年11月の調査について報告する。12日の調査期間のうち、観察日が6日間であり、そのうち9時間以上直接追跡のできた日が3日間である。

遊動の概略

11月1日から5日まで、I-b 群は観音堂、高岩山、飯場尾根、湊川上流域に囲まれる付近を遊動し、11日から13日にかけては、石射太郎の北東方向から小糸川を渡り、石射太郎を経て高岩山尾根道沿いに観音堂へ出、南下して飯場尾根の南の尾根を湊川上流へおりるという遊動を行なった。

この時期の遊動コースを規定する主要な食物は、ヤブニッケイの実であり、遊動コースを部分的に規定するものとしてリュウキュウマメガキ、ヤマノイモの種子が挙げられる。しかし、11月12日はクスノキの実が集中的に採食された。

¹⁾ 岩野泰三・西田利貞（いずれも東大・理）との共同研究。